
異世界の魔王と翼の天使

あるぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の魔王と翼の天使

【Nコード】

N8151N

【作者名】

あるぴよ

【あらすじ】

普通の高校生活を送っていたロキは、魔王として異世界に召還される。いきなり魔王になれと言われても、もちろん、答えはノー。断ったら入れられた牢屋。そこで、光をまとう天使と出会う。魔王なのに勇者と間違えられつつ、なぜ、自分が魔王なのか。魔王とはなんなのか。ここにいる意味を知るために、いろいろ非常識な仲間と共に歩み始める。挿絵たっぷりでお送りするつもりです。

魔王になれといわれても

> i 1 1 6 7 2 — 1 2 8 6 <

いつも朝にするように、俺は防寒具を着、高校へ向かっていたはずだ。

見慣れた道を歩いていたら、いきなり脳内をかき混ぜられるかのような気分の悪さを感じた。おとなしく家に帰ろうとしたところ、虹色に濁る風景が広がり、気を失ったのは覚えている。

それから、俺はどうしたんだったか？

状況を把握しようとしながらも、痛む頭をおさえ、目の前に広がる状況を呆然と見ていた。

「魔王サマダ！ 魔王サマの召還セイコウ！」

見るからにグロテスクな生き物たちが俺の周りに集まっている。ゲームとか漫画だとかで良くある、魔物や妖怪と呼ばれる物たちとよく似ている。といっても、実際見るのは初めてだが。最新技術に比べようのないぐらい、リアリティがあるそれらは、異臭すら放っている。

ありえない光景だが、すでに夢じゃない事は理解していた。夢と現実の区別が付かないほど、のんびり過ごしてるわけじゃない。

それでも、誰でもこう思うだろう、お願いだからこれは夢だとい
つてくれ。こういう生き物は空想の産物、ってのは常識だろう？

魔物たちの代表だろうか、一步二歩と、ゴブリンを縦に伸ばして
コウモリの羽を生やした　まるでキメラのような不安定な見た目
をした、それでもどこか風格のある魔物が近づいてきた。

その魔物は動けない俺を、赤くギラギラと光る目で見下すところ
言い放った。

「世界征服、シロ。オマエ、キョウカラ魔王」

魔王だって？

これを聞いた時の俺の表情は、きつとはたからみたら面白いぐら
いにだらしない顔をしていただろう。

しかし、魔王に世界征服とくると、人間の敵になるという事じゃ
ないか。今まで一般人でやってきた男に、この魔物は何を望んでい
るんだ。

断れば魔物に殺されるだろうと分かっていたはずなのに、俺は魔
物をにらむと言っていた。

「断る」

人間辞めるつもりも、人間を殺すつもりもまったく無い。

後から思えば、ここで適当に話をあわせて自分の命を優先していたらよかったのだろう。

でも、これからの出会いの事を考えると、この言葉を言ったこのときの俺は、何よりも正しかったんだと思うんだ。

> i 1 1 1 6 9 3 — 1 2 8 6 <

翼の天使

腹に鋭い痛みを感じた後、気が付いたら、どうやら牢屋らしい所に居た。さつきまでは魔王様だと言っていたのに、この世界では王は牢屋で暮らすものなのか。

くらり、と上半身を起こす。手と足は縄で縛られていて、起き上がるのに苦労してしまった。

ここは、暗いな。鼻につんとくる臭いに、眉間にしわがよる。固そうな石で乱雑に作られた痛々しい跡のついた壁に、しっかりと作られた鉄の柵が浮いて見えている。

こんなのは日本じゃ考えられない不思議体験だな、と失笑がもれた。

「起きたのですね」

いきなり背後から声をかけられて、我ながら感心するぐらいの反応で振り返った。予想以上に俺は、緊張状態にあっただらしい。ああ、心臓が飛び出たかと思った。ぜったい寿命が少し縮んだな。どうせ、ここで死ぬ気もするから、たいした事ではなさそうだけど。

> i 1 1 6 9 6 — 1 2 8 6 <

振り返ったそこには、光があった。……っていうのはおかしいな。

白い人　俺と同年ぐらいの、中性的な顔立ちに、優しい目をした青年がいた。筋肉があるのか疑ってしまうほど細いシルエットに、全体的に色素が薄いのもあいまってか、印象はとても静かだ。そして、白い光をまとう姿は、まるで、

「へえ、天使なんて本当に居るんだな」

思わず、感嘆したように呟いていた。

「ああ、つまり、今から死ぬ俺を迎えに着たのか？」

最後が、こんな見知らぬ場所だなんて。大丈夫。どうせ、俺を待っている人は、もう居ない。しかし、俺もとうとうあっちに行くのか。あっさりと感じつつも、未練が無いわけではない。

どうせなら、人生最後に出会う人間は　天使だからカウントされないのかもしれないが、女の子が良かったな。なんて事もよぎりつつ。

そうだな、どうせ連れて行かれるなら、女の子が良かった。俺の人生は、彼女居ない暦〃年齢な上に、女性と関わることなんてないに等しい、寂しいもので。最後ぐらい、な……。

「僕は別に、貴方をあの世につれて行くために此处に居るわけではありませんよ」

そろそろ、走馬灯のように思い出が蘇りそうになったところに、
気抜けしたような声で言われて、自分を取り乱していた事に気が付く。

冷静になると、だんだんと恥ずかしさがこみ上げてきた。

「わ、悪いな……、いきなりな事が続きすぎて、混乱してたみたいだ」

恥ずかしさで顔を背けつつ、ちらりと目を向ける。よくよく見れば、相手はただの青年。何で、天使だなんて勘違いしたのか。迎えに来てもらうとしても、腹が少し痛むだけで、まだ俺は死んでない。

青年はというと、こちらを見ながら何か考えているようだった。
この人頭がおかしいとか思われていたのかもしれないな。……普通だったら涙が出る所だ。俺がうな垂れていると、青年が、にこりと微笑んだような気配がした。

「僕はツバサです、よろしく願いしますね」

「……ん、ああ、俺はロキ。よろしくな」

いきなりの自己紹介に驚いたが、何とかあまり慌てずに返すことが出来た。

ツバサ。そう聞いて、まるでこいつが天使になるのに足りない部分を、名前で補ってるようだな。なんて思った。

でも、男に対して天使、と思ったのは失礼だよな。俺だって、そう言われても微妙な気持ちになるし。

「そういえば、ロキは、天使が居ないと思ってたのですか？　そういう方にはじめて会いましたよ」

ツバサはすこし首をかしげ、目を細める。優しげな目に、その仕草はよく似合っていた。

ああ、この世界　異世界で間違いないだろうここでは、天使は当たり前にいるものなのか。こちらの常識が無いのに、下手に話すものじゃないな。

「いや、そういうわけじゃないけどさ」

俺は言葉を濁す。

別に異世界から来たと言っても別に良いんだが、ツバサの事を一度天使と言ってしまった手前、これ以上に変な事を言って、変な奴だ、と軽蔑されたら、この牢屋の中で、寂しい思いだけして息絶えるのか、そんなの、たまったもんじゃないしな。

それに……異世界から来た「魔王」っていう公式があるかもしれない。しばらくは様子を見ることにしようか。

「そういえば、ツバサはなんで牢屋に入れられてるんだ？ 魔王退治に来て張り打ちにでもあったのか？」

魔王についての知識も得たいので、思いつく質問をしてみる。魔王を倒すといえば勇者だが、別に誰が倒しに来ても別にいいだろう。すると、ツバサはさらに目を細めた。先ほどの優しい目と違い、今度は呆れが見える。張り打ち、と言った事に怒ったのかと思ったが、違うようだ。

「貴方が魔王でしょう、何言ってるんですか」

しまった。魔王って事はばれていたのか。でも、普通は牢屋に入られてる時点でおかしいと思うだろ……。この世界では王が牢屋で暮らす、っていうのもあながち間違いじゃなかったのかもな。

どうせならこのまま知りたい事を質問していこうか。向こうも手がつながらなくて行動に移せないし、魔王知っても攻撃的な態度を取られていない所を見ると、安心して良いかもしれない。

「何で俺だって分かったんだ？」

「さつき会った、ふんぞりかえっていた魔物よりも貴方の方が魔力が多いようなので。あとは、勘ですね」

へえ、俺にも魔力ってあるんだな。ふんぞりかえる魔物、と聞いて、あのキメラのような見た目の俺に蹴りを入れた奴を思い出す。おそらくアイツで間違いないだろう。思い返したら、腹が立ってきた。

「まあ、当たってるようで当たってないな」

俺は一息おいて言う。

「魔王ってあれだろ、魔物の王になって初めて呼ばれるものだ。それなら俺は魔王じゃないな。あのずる賢い顔したアイツが今のところ魔王って奴だろ」

そう言い切る。これはどっちかというと、散々な目にあった不満を込めた、愚痴に近い。

それを分かったのか、ツバサはくすりと笑い、

「確かに、そういう考え方もありですね」

楽しそうに、そう言った。

> i 1 1 1 8 5 2
— 1 2 8 6
<

終わりの土地へ

「さて。いつまでも無駄話してる場合じゃないですね」

気がついたら、ツバサを縛っていたロープは地面の上にだらしく垂れていた。なんだ、意外にも縄抜けの達人だったのか。もしかしたらツバサは、良く捕まっているほどの事をしている、って事で、怪盗だったりするのだろうか。魔王城には宝物を盗みに来た、とか。

俺のロープも切って貰う。窮屈な格好をしていたらか、すごく開放感があった。伸びをして、予想以上に固まっていた体をほぐす。やっぱり、ずっと正座もどきの体勢はきついよな。

「今は、とつとと此処から出て、とんずらするべきです。あの、むかつく顔を一度も殴れず仕舞いなのが悔しいですが」

物騒な言葉が聞こえた気がするが、気のせいとしておこう。

ここから逃げるつもりらしい事に、俺は気持ちが悪くなった。まだ、家に帰れる見込みはない上に、外に出ても当てが無いが、こんな所に居るよりかはずっとましだろう。

でも、脱走、できるのか？ 監視が居ない訳じゃないだろうし。武器も無く丸腰で、あんな魔物達に勝てる気はしない。唯一、こちらの世界に一緒に来た荷物も、奪われてしまった。

「ツバサは、魔物を倒せるのか？」

目の前の青年があれを倒せるようにはとっくい見えないが、ここは異世界。こちらの常識よりもずっと上の戦闘能力をもってるだろうし、魔法もある。それらをもってすれば……。

だが、見えて来た希望に反して、ツバサは首を横に振った。

「僕は、攻撃的な魔法が使いません。魔物を倒すには、いささかしんどいです。って事で、ロキさん。僕の護衛お願いしますね」

いやいや、そんな素敵な微笑でお願いされても、困る。

「悪い、戦ったこと無いんだが」

俺は少し前まで普通の高校生で、魔物なんて見たのは生まれて以来、初めてだったわけで。もちろん、喧嘩すらしたこと無い。武器と呼ばれる武器も、レプリカを持ったことがあるくらいだ。

「……魔王なんですし、闇魔法の名前を言えば出るんじゃないですか？ ほら、ダークネス、って」

ツバサが牢の柵を指差す。

この世界には魔法があると分かっていたが、魔力があると言われるたとはいえ、自分に使えるとは思っていなかった俺は戸惑った。

小学生の時は友人とふざけて言っていたこともあるが、この歳になつて、技名を叫ぶって言うのは恥ずかしいな。

指差した、って事は壊せということなのだろう。気持ち、手を前にかざしてみる。俺は形から入るタイプなんだ。

「よしっ……《ダークネス》！」

そう唱えたたん、目の前で闇が爆発した。それは渦を巻きながらブラックホールのように空間を喰い、飲み込む。

あれほど頑丈に構えていた柵の姿は、消えてしまっていた。

「本当に魔法だ……！」

自分の手をまじまじと見つめる。先ほどと見た目は変わっていないが、確かにここから魔法が出たのだ。一度、いや、何度も願ったことがある、魔法を使ってみたいっていう願いが、今になって叶うなんて思っていなかった！

「本当に、出るなんて……びっくりです」

ツバサも驚いたようで、目を丸くしてこちらを見ていた。お前……半信半疑だったのに、言ったのか。もし出なかつたら俺は思いっきり叫んでおいて、不発という凄く恥ずかしい目にあつてたことになる。人間不信になりそうだぞ。

「って、ばかつ、魔力の使いすぎですよっ」

俺が魔法を使ったことにより、上の階が騒がしくなっていた。牢屋から魔力を感じ取り、騒ぎになっているのだらう。魔法って便利だけど使い方によって厄介になるんだな。でも、そんな事言うなら最初から言ってくれたらいいだらう。初めて使ったんだから分かるわけない、俺は悪くないだろ。それに、結果として、牢は空いたんだから問題はなし。

「ほら、脱出するんだろ、敵が集まる前に早く行くぞ！」

俺たちは、牢から出ると一目散に走っていた。どうせもうばれてるんだ、魔力の調整なんて後から覚えればいいだらう。そう思い、壁を突き破れないかと、壁に向かって魔法を放つたりもしてみた。しかし、その先は土。どうやらここは地下らしい事が分かり、今は

上の階に行くことのできる階段を探している。

走っていて違和感を感じたのだが、相当な距離をマラソンしているにもかかわらず、スポーツをしていないわけではなかったが、元の世界に居たときよりもあまり疲れを感じない。基礎体力が上がっているらしい。おかげで、魔物が追いかけてきてもスピードを上げて引き離すことが出来た。

そこで気になったのはツバサだが、息も切れずついてきてる所を見ると、心配は要らないらしい。さすが異世界の住人だ。いや、盗賊だったっけ？

そうやって順調に進んでいたのは良かったのだが、やはり簡単には外に出してくれないらしい。階段の前には、毛むくじやらの巨大な体をどしりと揺らしながらこちらを見ている　トロールもどきが居た。

後ろには追いかけてくる奴らがいて、ここで立ち止まっている暇はないのに。苛立ちと焦りで、ひやりと体が冷えるような感覚がした。

「ロキさんっ、先ほどのようお願いします！」

ツバサに言われ、いざ、相手に対して手をかざすと、怖くてたまらなかった。殺気、というものを始めて知った。トロールもどきは確かにこちらに敵意を向けている。目をあわすと力を吸い取られるようで。とても、恐ろしい。

しかし、まずは自分の命だ。本当なら、魔物とはいえ、傷つけるなんて事、したくない。気絶ぐらいにとどめればいいのだが……。

「……魔物を殺すのが心ぐるしいのですか？」

ツバサが心配な目で見てくる。俺の迷いで、巻き込むわけには行かない。

「《ダークネス》！！」

ここは、俺の居た日本じゃない。時には人が襲い掛かってくるところもあるだろう。こんなところで、自分を殺そうとしてくる魔物にさえ恐れていてどうするんだ。

魔法で、良かった。剣で斬りつけるとかじゃなくて良かった。手に感触が残ったり、返り血なんて浴びたら、正気で居られなかっただろうから。俺は、魔法に呑み込まれるトロールもどきを、見ないようにして階段を上った。

「魔物って言ったって、生きてるんだと思うと、辛い……。けど、やめようとか、甘いことは思わない」

俺だって、これからもっと力を付けて、牢屋にほり込みやがった、あいつのえらそうな顔を一発殴らないと気がすまないしな。魔王な

んだし、経験さえ詰めば、あいつよりも強いはずだ。……たぶん。

「良い心構えです」

階段を上ると、日の光が見えてきた。さようなら、魔王城。魔王城はやっぱり、始まりの地より終わりの地の方が似合っていると思うよ。

> i 1 1 1 7 3 9 — 1 2 8 6 <

森、崖、洞窟。

魔王城の外は、うつそうとした森だった。俺よりも背の高い、見たこともない植物がぎっしりとはびこっている。らしい、といえはらしいが、俺としては、魔王城の周りというのは、生物が住めないところのはずであって。

「灰色の枯れた崖の上に建っていて、背景はコウモリと雷のイメージなんだがな」

「それだったら、崖を切り崩して城を落とす事が出来て嬉しいのですけどね」

ついでに雷さんにも落ちてもらって、復讐もさっぱり完了です。とツバサがうなずく。やっぱりこいつは天使より、怪盗だとか、そういうのがぴったりだと思う。「でも」俺は首だけを、木々に隠されすでに遠くなった魔王城に向けた。

「視界を遮ってくれるおかげで、敵を撒きやすい。助かったのは確かだな」

「気は抜かないくださいよ、魔物には獣のように鼻が利くのも多いはずですから……、ほら、来たようです」

草が擦れあう音に混じり聞こえてきたのは、獣の唸り声。(……

先手必勝っ）魔物が居るだろう方向に魔法を撃つ。

「キャインッ」

小さく獣が鳴く。無事に魔法が当たった事にほっとする。が、それが隙となってしまった。青色に輝く、三本に分かれた巨大な尾を持つ狼が、真横の茂みから飛び出してくる。（しまっ、た）慌てて移動したおかげで、辛うじて腕を引つかかれただけで難を逃れたが、もしあの牙に、噛みつかれていたら。

「堕ちろっ……《ダークネス》！」

狼は、俺の撃った魔法に吸い込まれるようにして、消えた。この魔法、相手を傷つけ弱らせるとかじゃなく、闇に吸い込まらしい。どこに行くのか、気になるが、確かめるわけにもいかない。だが、近距離で使えば、自分まで巻き込んでしまうのだろう。

「ロキさんは、攻撃する時に目をつぶりすぎです。危ないですよ」

ツバサが、辺りを見渡し、もう魔物が居ない事を確認すると、こちらに歩いてくる。

そうは言われても、生きていたものが死ぬ所は見てて気分が良い訳ないじゃないか。たとえ、それが虫でも、何でも。死骸なんて見

たくない。もしかして、この気持ちが魔法の性質に影響しているのか？「う」どうも、先ほど狼に噛まれた傷が痛む。菌が入ったら困るが、あいにく俺は救急セットを持ち歩くような、まめな性格じゃない。

「ツバサ、消毒できるものとか、持って無いか？」

「……怪我したなら早く言ってくださいよ」ツバサは、一つため息をする。「今のところ、貴方に死なれると困りますので」

素直じゃないな。と言いたい所だが、実際それが本音だろう。魔王城から出たとはいえ、先ほどのように強力な魔物が出る場所で、俺しか戦えないのだから。

「見せてください、治癒魔法をかけます」

ツバサは腕まくりをし、気合いを入れ直した。

傷を治せるなんて、便利な物もあるんだな。異世界の良さをやっとなかったんだけど。まあ、こっちにこない限りこんな怪我也するこ我を負ったのは、やんちゃしてた小学生以降、滅多にした事ない。

というかツバサ、魔法、使えるんじゃないか。

「僕は、攻撃的な魔法が使えないって言っただけですよ。……魔力

「があまり無いので、他の魔法も、一日一回が精一杯ですが」

問いたげな顔に、気づいたのか、ツバサが答える。へえ、魔法って、使える限界とかあるのか。俺の魔法はどれくらいなんだろう。魔力は多いみたいだから、大丈夫なのだろうか。これが使えなくなったら、すごく困るんだけど。治癒魔法が、他の魔法よりも消費が大きいとかであって欲しい。

「便利かどうか分からないな」

「うるさいです、魔力ばか」

「痛ッ」

ツバサは、乱暴に俺の腕を引っ張ると、手を添える。おいおい、怪我してるって分かっているんだろうか。激痛とまではいかないが、結構深いその傷は、ずきずきと、痛む。飼いだに引つかかれても、これぐらい痛いのだろうか。可愛い顔して、犬って怖いのかも知らない。元の世界に戻ったら、気をつけよう。

「『世界よ。彼の者の時の流れを変化させる事を許可する。治れ、ヒーリング』」

ふわり、と森の風のように優しく、春の太陽のような暖かな光が辺りを包んだ。電球やLEDの光でも、ホタルの光でもない、は

じめて見る光。痛みは、傷は、あつという間に消えていた。

「ツバサの魔法って優しいんだな」

発言は優しくないけれど。そう付け足しそうなのを呑み込みつつ。
「はあ、」ツバサは腕からこちらに視線を移すと、奇妙な物を見るようにした。

「俺が始めて体験した魔法ってのは、魔物が使う、頭がガンガンぐらぐらする物だったからさ」

「なるほど、災難でしたね。闇の魔法っていうのは攻撃特化ですから、仕方がありませんよ、命を落とさなかっただけましです」

「冗談にならないから、怖いよな。さて、その危ない魔法を食らわないように、逃げないとな。」

「いったい、この森、どこまで続くんだ」

早く、人間の居る所に行きたい。まあ、魔王城の近くに村とかあるとは思えないが。そろそろ、お腹もすいてきた訳で。テレビで見るのすら、いくつか道具が用意されているっていうのに、こんな、何もなしからスタートのサバイバル生活なんてまっぴらごめんだ。

「僕は知らないですけど、魔王の貴方なら知ってるんじゃないんですか？」

う、そう言われると困るな。しかし、お前はいつたい、どこから入ってきたんだよ。そう聞きたかったが、せっかく俺が牢屋に入ってた事や、不審な点を深く聞かないで居てくれるのに、申し訳ない気がして、やめておいた。

不意に、ツバサが立ち止まり、上を見上げる。それにならうと、高くそびえ立つ、岩の断面が見えた。

「困りましたね、崖、です」

「しまったな、行き止まりか。……ん？」

「、どうしました？」

崖の、一部が緑色に光っている。異様に思い、近寄って調べてみると、光っていた岩一面が、ガラガラと崩れ落ちた。先には、空間が広がっている。どうやら洞窟らしい。

「ここ、結界が張られていたんですね」

「つまり、何か重要なものがあるって事か」

「もしくは、出口ですね！」

嬉しそうに、洞窟に進んでいくツバサに続いて、中に入った。こ
ういう、じめじめして暗い所は、すごく、ものすごく嫌いなんだが
な。コウモリや、虫が、出ないように祈った。

けれど、ああ、まずは魔物が出ないように、って願うのが先だっ
たな。

「ふふ、ここが見つけれられたのは褒めてやるが、残念だったな。唯
一の出口なのに、守りが弱いと思ってたら大間違いだ。魔法のエキ
スパートの俺様が居れば、貴様うなんて、いちこ口だからな」

洞窟の先には、コウモリや虫は居なかったが、緑色の光の放つ、
ぐにぐにと動く、ゼリー状のよくしゃべる物体が居た。そう、冒険
の最初、お馴染みの経験稼ぎ。雑魚モンスター。

「おお、スライムだ」

「ぐふ……っ」

俺が名前を口にしたとたん、スライムがハンマーで殴られたかの
ように、その場に倒れこんだ（んだと思う）。やれやれ、ツツコミ
の代わりに、こけるって表現は、漫画ではもう使われない、古いリ

アクションだぞ。

「何故貴様ラみたいな人間が、私の弱点が、スライムと言う呪いの言葉で呼ばレル事だと知っているのだ！」

ぴくぴくと動くそれは、地面に張り付き、盛大に独り言を言っている。

コイツの弱点とか知ってるわけなかったが、正直、名前を呼ばれるだけで瀕死になるなんて「弱ッ」って思ったりとか、いったいどこから出てきたんだって考えたりだとかしたことは言葉にならなかった。

「残念ながら、ロキさん、声に出ていますよ」

「き、貴様ラ……！ コケにしゃがんで！ このスライム様が、ただで死ぬと思うなよ！」

不敵な笑みを浮かべると 雰囲気がそんな感じだっただけで、顔はないのだが スライムは、叫んだ。

「呪いをかけてやる！」

何かぶつぶつと唱え始めるやいなや、現れたのは呪いという言葉

通りまとわり付くような、どろりとした黒い煙。あわてて口をふさぐが、すでに入り込んだのか、肺や器官に感じる違和感に、むせ返った。

「これで、貴様方は一生不幸だ。はは……ははは……！」

光となつて消え行く悪魔の断末魔が洞窟に反響し、俺達はその光に飲み込まれるように、その場から消えた。

> i 1 2 0 7 2 — 1 2 8 6 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151n/>

異世界の魔王と翼の天使

2010年10月9日01時17分発行